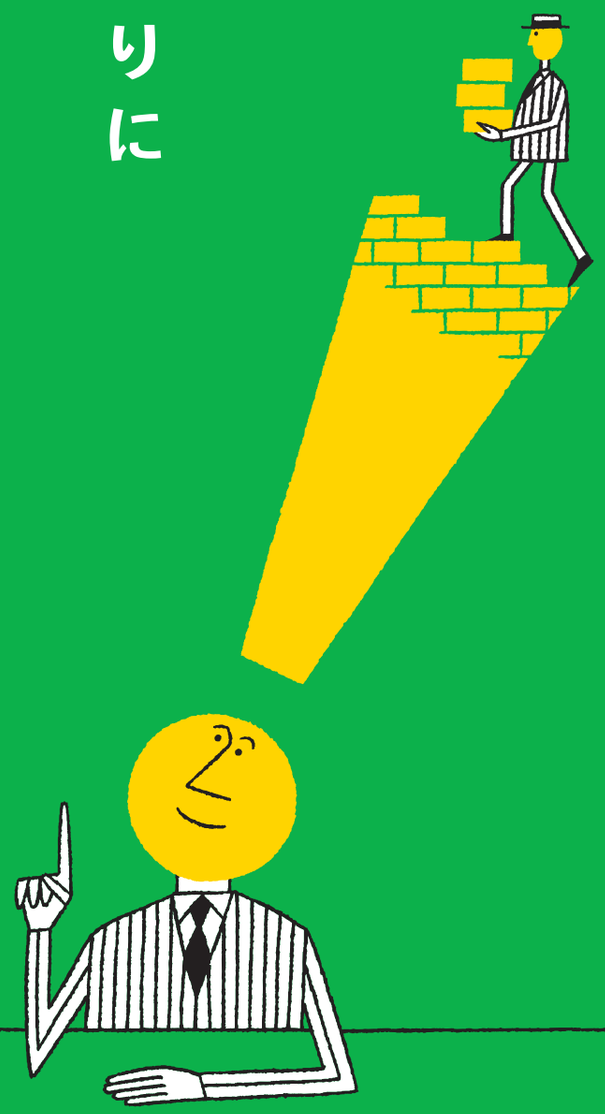
ご自由にお持ちください。

自分なりに「復興」を考える7つのヒント



きっかけを求める、すべての人に。

三井住友フィナンシャルグループ

SMFG

私たちが取り組む課題について、
ホームページで詳しくご紹介しています。

http://www.smfg.co.jp

「SMFG」で検索 ▶ トップページ ▶ 企業の社会的責任（CSR）

「わからない」
というところから
はじめよう、と思う。

ふつうに毎日暮らしていると、いろんなニュースが流れてきます。

画面の向こう、窓の向こう、つぶやきの向こうに、

いろんな出来事があって、いつも、次のニュースに流されていく。

たとえ、その場所にいたとしても、見えるのは一面だけかもしれません。

立ち止まって、自分なりに考えるために大切なのは、

自分自身に引き寄せて、イメージしてみること。

まずは、ヒントを持っている人に、会いに行ってみましょう。

「復興」の現場には、きっと、「今の考え」があるはずです。

01 あの日から、これまで。現地でしか分からないことがありました。

震災から1年半、メディアの報道は沈静化しても、
被災地が元に戻ったわけではなく、「復興」は、まだまだ始まったばかり。
しかし、求められていることが、刻々と変化していることも事実です。
被災地と、それ以外。そんなふうに別れてしまわないため、「もう一つの目」を持つために。
ボランティアで訪れた人に、現地で感じたことを聞いてみました。

2011.
3.11

Phase1 震災直後

多くのボランティアが訪れ、泥やガレキの除去、
片付け、炊き出しなど復旧・生活支援に役割を果たした。

作業中は、心が凍りついたように
何も感じなかった。そうしないと、
感情を維持することが
できなかった。

震災4ヵ月後、初めて被災地に行きました。
「忘れられてしまうんじゃないかと不安だった。
だから、来てくれるだけでもうれしいんです。」
そう言われました。

1回目はヘドロかき。
2回目はガレキの撤去。
求められることは
刻々と変わっていました。

Phase2 ギャップの時期

被災者の仮設住宅への入居が進むものの
荒れ果てた地域との差が広がった。

東北の復興は、
思ったよりも進んでいなかった。
でも、その中で頑張っている人が
大勢いた。

被災地は広い。
ガレキを撤去するのには、
数十年の時間がかかると思う。

ガレキ除去などの
力仕事だと思っていたら、
写真の洗浄をやることに。
それが、持ち主の人たちに
いちばん喜ばれることだった。

たとえ撤去作業が一段落したとしても、
人は人でしか救えない。
そう強く思った。

Phase3 心を救う支援

仮設住宅でのコミュニティづくり支援や
心のケアなど、ボランティアへのニーズが多様化。

仮設住宅の中で
ふさぎ込む人が増えている。
何が必要かといえば
それは、心のケアだと思う。

バスの運転手さんが語り部をしてくれた。
語る場を与えてほしいと言っていた。

前に向かって生きていきたいけど
何をしたらいいかわからない。
ひとりの被災者から、そんな話をききました。

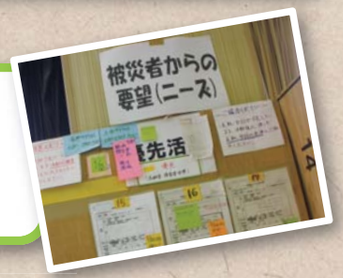
震災から1年以上。
このタイミングのボランティアに
意味があるのかと思っていた。
実際に被災地を見て、
180度考えが変わった。

Phase4 そして、復興へ

復興まちづくりへの参画・協力を通じた
雇用創出のニーズも高まっている。

現地でなにかを買うことが、支援になる。
実際に行くと、そのことがよくわかる。
ボランティアをした後も、現地のものを
継続して買っていきたい。

ボランティアをして、
本当に感謝された。
本当に必要とされているんだ、
という実感があった。



ヒント01

忘れないため、できること。

たとえば、現地の商品を買うこと。遊びにでも
いいから、訪れてみること。「忘れていないよ」
という気持ちは、きっと、誰かの勇気になります。

02 接客のプロは、思いやりのプロになれる。

SMBCコンシューマーファイナンスの
取り組み

「お電話を下さる
方々を、緊張させな
いような話し方を
心がけていました。」

被災地の津波災害ボランティアセンターで電話応対に当たったこの女性は、福祉の専門家ではありません。SMBCコンシューマーファイナンスのコミュニケーション拠点「プロミスお客様サービスプラザ」の心斎橋プラザに勤務(当時)する坂田さんです。

震災直後、助けを求める声と、毎日何千人単位のボランティア志望者があふれた被災地には運営スタッフが不足していました。こうした事態を受け、「お客様サービスプラザ」社員の有志が、全国から集まって支援を行ったのです。

「接客のプロとしての応対力を感じました。日頃からお客さまをお待たせしない、お客さまに安心感を与えるという意識が統一されているから出来ることだと思います。」「誰に対しても素敵な笑顔でコミュニケーションが取れることと、電話での応対能力の高さに驚きました。」(現地のボランティアセンター)という声もありました。

被災地の真のニーズに応えるためにも、支援者の「強み」が必要とされているのかも知れません。

ヒント02

できることは、何だろう。

必要とされていることをきちんと知り、
自分を活かす方法を驕らずに考える。
「人の役に立つ」は、奥が深い。

03

もとに戻すためではなく、前に進むため、必死で考えるんです。

宮城県 副知事 若生正博

宮城県、若生副知事と、三井住友銀行、久保副頭取。
ふたりが語ったのは、震災後の「経済」について。
この国が抱える地域の問題、過去の災害を教訓とすること。
これからの被災地が必要とするものが、浮かび上がってきました。

若生　まず最初に、震災以降、御社には寄付金やボランティアに始まり、地域振興策についてもいろいろとご支援をいただいており、心から感謝を申し上げます。

久保　いえいえ、とんでもありません。私どもとしても、「なんとかお役に立ちたい」という思いでやっています。

若生　私たちは、今年を「復興元年」と位置付けておりまして、いろいろな事業が今年から本格的に始まっています。産業の再生は喫緊の課題ですが、沿岸部では、広範囲の地盤沈下の問題が立ちはだかっており、かさ上げした後でないと、事務所や工場を建てられません。産業が活動を本格的に回復するのはその後になりますので、息の長い支援は本当にありがたいです。問題はいっぱいありますが、中長期的に大きな問題は、地域がどのように復興していくのかということです。被災地は、一次産業が中心であったところが多く、高齢化の進行も含め、そもそも地域が疲弊していました。したがって、単なる復旧ではなく、震災前以上に発展させるような社会システムづくりが、今後たいへん重要なファクターになってきます。御社には、ぜひそういった「知恵の支援」もお願いしたいと思います。

「本格復興」は、まだ始まったばかり。
社会システムづくりが今後重要なファクターになる。

三井住友銀行 副頭取
久保哲也

久保　私どもには、いろんな分野の専門家がおります。エコシティ、あるいは新しいエネルギーの開発、国家事業のプロジェクトには、当然、資金やノウハウが必要となりますし、それは、本職のところです。宮城県さんとは、震災前から産業振興に関して一緒に様々な取り組みを進めておりました。また、昨年九月には、七十七銀行さんとも共同で「宮城県産業復興セミナー」も開催しました。私たちのお客さまにも、こちらに投資なり、いろんな形でご支援したいという方々がたくさんいらっしゃいますので、橋渡しの役割も担っていきたいと思っています。

若生　そういったお話を、いろんなところで発信していただけると本当に助かります。震災から一年半が過ぎ、被災地では、自分たちに向けていただいていた目が、だんだん少なくなっているんじゃないかと、心細い気持ちも出てきています。末永いご支援が、被災地にとっては、ものすごい力付けになるんです。

久保　確かに、風化のリスクはあると思われますね。我々としてもCSR的な観点も含め、息の長い支援をやっていきたいという思いがあります。

若生　長期的な課題として、今は復興特需に湧いておりますが、冷静に見ますと、県全体で震災前と比べ二万人ほど人口が減少しています。県外に出られている方も九千人近くおられます。復旧が終わっても、仕事もない、人口も減っていたという状況になると、地域の疲弊がいっぺんに出てくるんではないかと非常に心配しています。知事が先頭になり、企業誘致を進め、あるいは観光で来ていただいてお金を落としていただく、人口が減少しても耐えられるような産業構造にしていこうと一生懸命になっているんですけれども、あと、四、五年という限られた時間でそういう産業構造に出来るのかというと簡単ではないと考えています。特に、阪神淡路大震災の際の経験が参考になると思いますので、神戸を拠点の一つとされている御社に、そのあたりの情報を、ご教示いただければと思っております。

「復興」は一過性のものではない。
長期的に、思いをつないでいくことが大切。

久保　私どもの調査部、日本総合研究所というシンクタンクなどには、神戸の地震の後の状況や、産業のことについて非常に詳しい者がおりますので、その方面についても、もちろんご協力できると思います。

若生　必ず、復興させていきますので、よろしくお願いいたします。本日は、ありがとうございました。

久保　ありがとうございました。

ヒント03

「五年先の街」は いま、生まれる。

五年後、十年後、被災地は住む人にとって、訪れる人にとって魅力ある街になれるか。正念場は、まさにここからかもしれません。

04

被災地の方々に受け入れてもらえたことが、いちばん嬉しかったんです。

三井住友銀行 東京と東北を行き来する二人が語ったこと

そう語るのは、銀行の公共・金融法人部で震災復興を担当する松澤さん。

「何が出来るのかも分からないまま、震災直後の被災地へ向かうことは正直戸惑いもありました。それでも実際に被災地に行ってみて、自分の目で見た現地の状況は想像を遥かに超えていました。」

松澤さんが先ず最初に行なったのは、17年前の阪神淡路大震災発生時に、同行が実際に経験した初期対応ノウハウなどを、被災地の各金融機関へ伝えることでした。

また震災から3ヵ月後、被災地のひとつである石巻市に入った髙野さんは、そのときの様子をこう語ります。

「最初に膨大な量のガレキに圧倒された。行方不明者の捜索もまだまだな状況と聞き、金融機関としてと言うよりも自分はここで何を出来るのかを自問せずにはいられなかった。」

現地には復興に向け同じ思いを持った、様々な業種の企業が集まって来ています。そこでは企業の系列を超えた「つながり」が生まれているといいます。

「あくまでも復興の主役は現地の方々で、私たちは黒子。だからこそ復興の手助けをしている中で〝あなたたちはちゃんと被災地のことを分かってくれているね〟と言われたことが何より嬉しかった。」と松澤さん。

「新しい街づくりの理想も色々あるが、現地の方々の〝本当のニーズ〟は何なのか。手さぐりでも少しづつ解決に向けて手助けをしていきたい。」と髙野さん。

住居問題や雇用創出など、本格的な復興はこれから。でも、現地の方々と同じ目線でコミットすることで、共感のつながりが生まれています。

髙野さんは、宮城県から託されたチラシを見せてくれました。

「今こそ宮城へ!」。現地の方々の願いは、人の手で伝えるからこそ、届くものなのかもしれません。

宮城県観光PRキャラクター むすび丸

宮城県では企業・団体向けに被災地での防災教育・ボランティアを紹介するプログラムを実施しています。

【お問い合わせ】
みやぎ観光復興支援センター
TEL:022-748-7380
E-MAIL:miyagikanko305@ray.ocn.ne.jp

ヒント04

伝えることが、可能性をつなぐ。

知ることの次は、伝えること。
当事者になるからこそ語れることが、
人を動かしていくのかもしれません。

05

ボランティアを通して成長する新入社員の姿に、私たちも刺激され、学ぶところがありました。

SMBC日興証券 広報部CSR室 社会貢献活動研修の現場より

復興支援を、新入社員研修の一環に取り入れる。その社会貢献活動研修は、被災地のために企業として何かできないかという社員の想いをきっかけに生まれました。SMBC日興証券広報部CSR室長の佐野さんはこう語ります。

「社会貢献活動に臨む前に、新入社員たちの言動が被災地の方々に失礼にならないように、オリエンテーションは事前の準備として欠かせません。その上で、彼らは実際に現地の状況を見て、厳粛に受け止め、真摯な態度で活動に当たってくれました。」

昨年、新人として研修に参加した北千住支店コンサルタント課の加藤さんは、現地でヘドロかきなどの作業に当たりました。「被災地は、悲惨な状況だとわかっているつもりだった。」しかし、彼の予想は、打ち砕かれます。自分がやっている事がどれだけ役に立つのかと思いながら作業を続ける中で、顔を上げさせてくれたのは、被災者の心からの「ありがとう」という言葉。「必要とされていると実感しました。」と、彼は振り返ります。

2年目の今年は、南三陸町で漁業支援の活動を行いました。世間で震災の記憶が薄れる中で、今年の新入社員の中には、被災地はすでに復興に向かっていると考えていた人も多かったため、活動場所である南三陸町に入った途端、彼らはバスから見える光景に声を失ったといいます。

しかし、そこで出会ったのは、悲壮感に沈むのではなく、力強く復興に向かう人の横顔でした。

「復興に向けて頑張っている漁師の人たちから、ありがとう、おかげで助かったと言われ、逆に勇気づけられました。」

いま、復興国債の営業をしている新入社員は、被災地で見聞きしたことを、自分の言葉で伝えようとしています。

「新入社員が自らの体験から前向きに学び、お互いに語り合い、入社時と比べて成長してたくましくなっていたことが、うれしかった。」と語るのは、昨年から引率に当たった人材育成部の鷹羽さん。

復興への道のりは遠い。しかし、そこにはたしかに、人の想いが育っていました。

ヒント05

「復興」は、ときに人を育てる。

求められ、応える「働く」の基本。
新入社員たちにとって復興の現場は、
それを学ぶ場でもありました。

06

ひとりぐらしのお年寄りを、ひとりぼっちにしない方法。

一般社団法人OPEN JAPAN「サンライス元気村プロジェクト」

© 2012 Arito Suzuki

被災地は、日本全体が抱える課題に、凝縮した時間で向き合っている場でもあります。少子高齢化問題も、その一つ。仮設住宅で新しい暮らしを始める人々がいる中で、ひとり暮らしのお年寄りは、どうしても孤立しがちになってしまう。そんな状況を、アイディアで変えようとしているのが、一般社団法人のOPEN JAPANと日本カーシェアリング協会が連携して取り組む、「サンライス元気村プロジェクト」です。

日本全国の支援者の気持ちを毎月3キロのお米とメッセージカードに託し、集まったボランティアの手で、直接届けます。少しでも気持ちが外に向き、近所づきあいが活発になれば、神戸の震災で問題となった「孤独死」も未然に防げるはず。そんな想いで、2011年11月8日に万石浦仮設住宅で第一回を行ったのを皮切りに、今ではさらに多くの仮設住宅で展開しているということです。

「被災された方たちの気持ちが、少しは理解できたと思う。」「また来てほしいと言われたときには、感情が高ぶって言葉が出なかった。」と、訪れたボランティアは語ります。

プロジェクトでは、お米や支援カンパ、ボランティアを募集しています。詳しい情報は、一般社団法人OPEN JAPANのホームページ(openjapan.net)まで。つながりが、被災地の明日をつないでいきます。

ヒント06

つながれるから、元気になれる。

ひとりではないということが、人が生きていく理由になる。被災地は、日本の課題に取り組む「先端」なのかもしれません。

OPEN JAPAN オープンジャパン

一般社団法人OPEN JAPANは、石巻を中心とした復興支援活動のボランティアを呼びかけています。

07

ふるさとを想い出すように、被災地を想い出してほしい。

いま、被災地では未来の街をつくる取り組みが始まっています。
気持ちを伝えることが、復興に向かって頑張っている人を勇気づける。
そこには、きっとあなたを待っている人がいます。

100年後の街のために。「わたりグリーンベルトプロジェクト」

被害を受けた防潮林の苗づくり・植樹や、新しい街づくりに取り組んでいます。くわしくは、「わたりグリーンベルトプロジェクト」で検索。苗木づくりを通し、町内外問わず関われる、未来づくりプロジェクトです。

人・もの・情報の集まる家に。「古民家再生 IBUKIプロジェクト」

津波を受けた古民家や蔵を、働ける場所、地域コミュニティ、地場産業による町おこしの拠点に。くわしくは、「OPEN JAPAN IBUKI」で検索。寄付による支援を呼びかけています。

ヒント07

形にすれば、絆は生まれる。

意外なほど喜んでくれた。また来てね、と言ってくれた。形にすることから、はじまることがきっとあるはずです。

森づくりから、観光資源を復活。「いこいの森・希望の島 プロジェクト」

奥松島宮古島の公園整備を通して、地域の観光資源を復活を目指しています。くわしくは、「スマイルシード」で検索。ワークショップや、寄付を募集しています。